

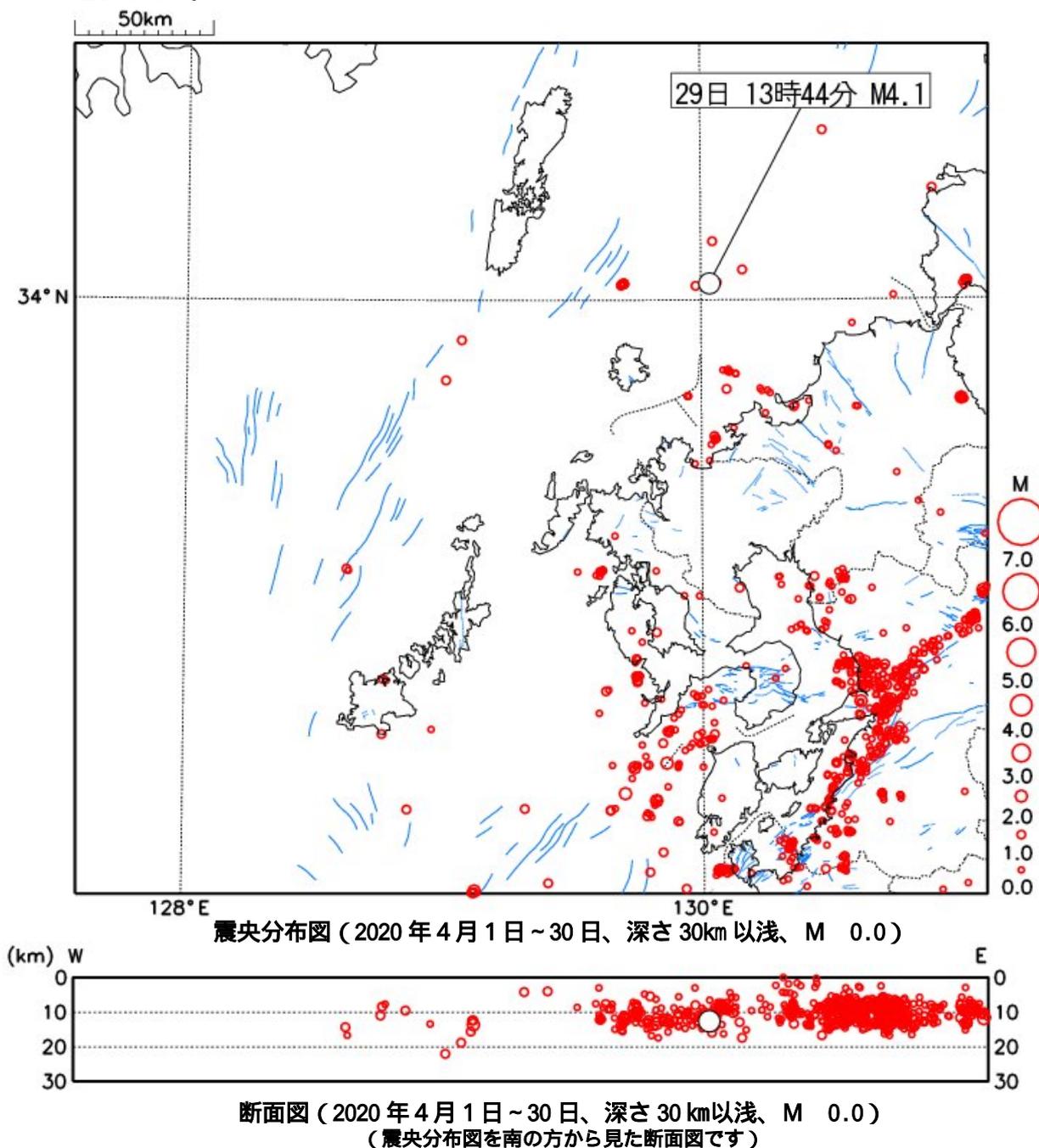
長崎県の地震活動概況 (2020 年 4 月)

令和 2 年 5 月 13 日

長崎地方気象台

地震活動の概況 (2020 年 4 月)

4 月に長崎県内で震度 1 以上を観測した地震は 1 回でした (3 月 : 4 回)。詳細は次ページのとおりです。



本資料の震央分布図の青色のラインは活断層を示す (活断層のデータは新編日本の活断層による)。

本資料は、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道大学、弘前大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、高知大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国土地理院、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会、青森県、東京都、静岡県、神奈川県温泉地学研究所及び気象庁のデータを用いて作成しています。また、2016 年熊本地震合同観測グループのオンライン臨時観測点 (河原、熊野座)、米国大学間地震学研究連合 (IRIS) の観測点 (台北、玉峰、寧安橋、玉里、台東) のデータを用いて作成しています。

2020 年 4 月 18 日から、暫定的に震源精査の基準を変更しているため、それ以前と比較して微小な地震での震源決定数の変化 (減少等) がみられることがあります。

福岡県北西沖

29日13時44分に福岡県北西沖で発生したM4.1の地震(深さ13km)により長崎県、福岡県、佐賀県で震度1を観測しました。長崎県では、壱岐市で震度1を観測しました(図1)。

1997年10月以降の地震活動をみると、今回の地震の震源付近(図2領域a)は、地震活動が低調な領域で、これまでM3.0以上の地震は発生していませんでした。

この領域で発生した地震により、震度1以上を観測した地震は、長崎県の震度データを活用開始した2002年7月29日以降初めてです。

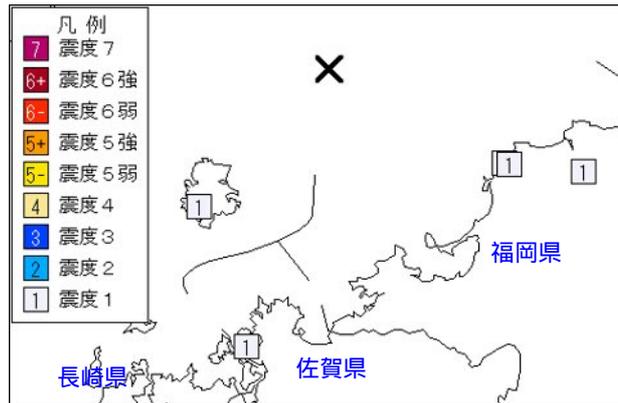


図1 震度分布図(観測点別、×:震央)

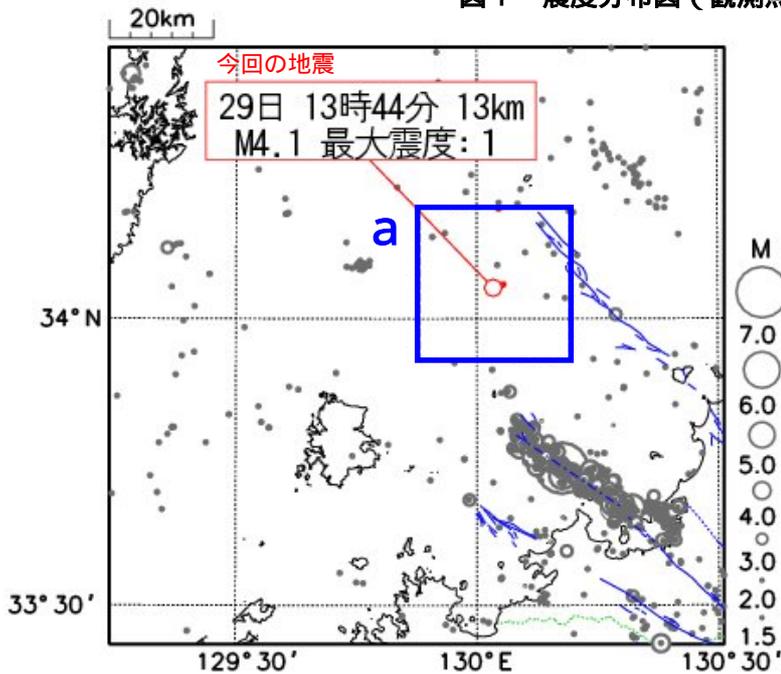


図2 震央分布図

図3 図2領域a内の地震活動経過図

(1997年10月1日~2020年4月30日 深さ0km~30km M 1.5)

2020年4月1日以降の地震を赤で表示

図中の細線は地震調査研究推進本部の長期評価による活断層を示す。

長崎県内で震度1以上を観測した地震の表(4月1日~30日)

地震発生時刻 各地の震度	震源地名	北緯	東経	深さ	規模
2020年04月29日13時44分 震度 1: 壱岐市郷ノ浦町*	福岡県北西沖	34° 03.2' N	130° 02.0' E	13km	M4.1

地震資料に使用される図の見方

長崎地方気象台では、地方公共団体等による日頃の災害予防の活動を支援するため、「長崎県の地震活動概況」を毎月作成し公表しています。また、長崎県で震度4以上の揺れを観測した場合や津波警報等を発表した場合には、防災対応に資するために「地震解説資料」を公表しています。今回は、「平成28年(2016年)熊本地震」を例として、これらの資料に使用される主な図の見方について解説します。

1. 震度分布図(図1)

震度分布図は、各地の震度観測点で観測した震度を地図上に表示し、地震による揺れの強さや範囲を表現したものです。震度5と震度6にはそれぞれ強弱があり、例えば震度6強は「6+」、震度6弱は「6-」と表示します。また、地震による揺れが広範囲にわたる場合には、図が煩雑にならないように、各地域内、各市区町村内で観測した震度の中で最も大きな震度を代表させて表示することがあります(図1は地域別の震度分布図の例)。

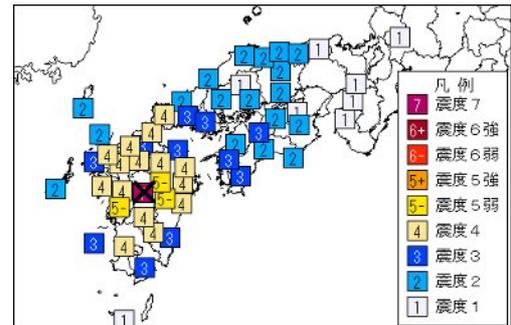


図1 震度分布図(地域別、×は震央)

2. 震央分布図(図2) 断面図(図3)

震央分布図は、地震が発生した場所を地図上に表示し、地震活動の面的な広がりを表現したものです。表示するシンボルの大きさや形を変えることで、地震の規模(マグニチュード、以下、「M」)や震源の深さを表現しています。

また、断面図により地震活動の立体的な広がりを表現します。図3は、図2の中の青線で区切られた領域を南東方向から見た断面図です。この断面図を見ると、地震活動が深さ20kmよりも浅い所でみられることがわかります。

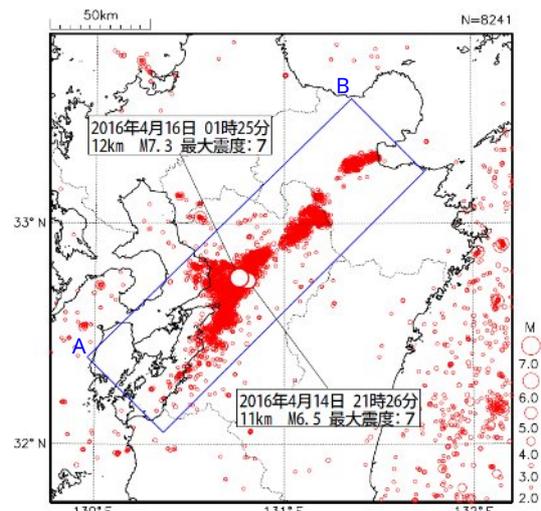


図2 震央分布図



図3 断面図(A-B投影)

3. 地震活動経過図と回数積算図(図4)

地震活動経過図と回数積算図は、ある領域内で発生した地震の規模や数(積算回数)について、時間の経過に伴う変化を表現したものです。

図4は、図2の中の青線で区切られた領域内の地震活動経過図と回数積算図です。この図を見ると、2016年4月16日にM7.3の地震が発生した後、時間の経過とともに発生した地震の規模が小さくなり、その数も徐々に減少していますが、活動は継続していることがわかります。

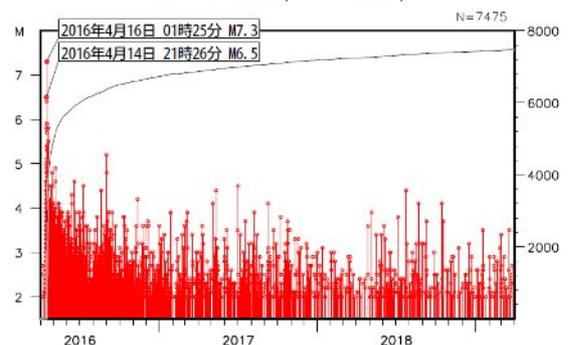


図4 地震活動経過図および回数積算図